下村理愛（スクールリーダーシップ開発専攻）

自分の納得した人生を！

１．教育を考える一言

「医学部に入るがなら、東京大学をめざしゃあいいねか」

２．背景

この言葉は私の高校時代の担任である H 先生が、地方大学の医学部を目指す T 君に対してかけたものです。私の高校はいわゆる地方進学高校で、毎年東京大学に進学する生徒は 20～30 人程います。難関大学を目指す生徒は、早朝に起きて、自転車こいで、自習室で勉強して、授業受けて、塾へ行って、寝て…というルーティン生活です。進路指導においては、成績上位 40 人には東京大学を勧める、という噂がたつほど、先生だけでなく生徒も東京大学進学にこだわっていたように思えます。

実際、私の友達も偏差値やネームバリューで大学を選んでいました。大学に入学してから朝まで徹夜でマージャンや飲みばかりしているし、単位もたくさん落とすし…それで就職活動の時期になってから必死に「自分のやりたいこと」を考え始めるのです。「こんなの何だか違う！嫌だ！」という気持ちから私はキャリア教育に興味を持つようになりました。

３．考察

私はこの経験から、「目的を持って進路を決定しないといけない！」という衝動に駆られました。しかし、一概にそうとは言えないのではないかとも最近思ってきました。イギリスのジョン・クランボルツさんという心理学者は「Planned Happenstance Theory（計画的偶発性理論）」というキャリア論を唱えています。ジョンさんは、たまたま出会った友達に勧められてテニスを始め、すっかり夢中になってしまいました。大学 3 年生になり、専門コースを決定する時も彼はテニス三昧でした。進路に迷ったジョンさんは、テニスのコーチに言われるがままコースを心理学に決めたら、いつの間にか心理学者になっていたそうです。このように、確固たる目標がなくても、偶然が偶然を呼んで今の自分があり、キャリアができているという考えです。目的がなくても気持ちの赴くままに行動を止めなければ自然とキャリアってその人らしく続いていくものなのではないでしょうか。

また、進学高校に行く賢い生徒こそ大学での学びを社会に還元する社会的責任があるのではないでしょうか。アメリカの Teach for America（TFA）という NPO 団体は優秀な大学生を学力レベルの低い学校に教員として送り出すという活動を行っています。TFA の経験を経たというステータスはアメリカ社会で高く評価されるので学生には大人気です。しかし、ステータス目当てにそのプログラムに参加したにも関わらず、TFA の活動を通して社会の弱い部分を経験した学生たちの多くが、進路を変更して教育に従事するそうです。日本の学生のどれだけが、自分は社会の一員だ、という認識を持っているのでしょうか。

参考文献

J. D. クランボルツ『その幸運は偶然じゃないんです！』ダイヤモンド社、2005 年

ウェンディ・コップ『いつか、すべての子供たちに―「ティーチ・フォー・アメリカ」とそこで私が学んだこと』英治出版、2009 年

「Teach for America オフィシャルホームページ」http://www.teachforamerica.org（2012/06/10 アクセス確認）